公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第76号

西都原

[4月定例山行1] 西都原古墳群散策 4月11日（日）

吉田直人

上井覚兼日記(天正10年と11年)の現代語訳が出たので読んでいる。京都では本能寺の変が起き、秀吉は毛利征伐に傾注していた頃の記録である。当時の島津領では、地頭制度が敷かれており、戦略上重要拠点に重臣を配置していた。上井覚兼はその重臣の一人で宮崎城とその付近の統治をまかされていた。上井覚兼日記は戦国時代の研究資料としては一等といわれており、当時の上級武士の生活や、天正年間の日向の国がいきいきと見えてくるのである。日記には多くの人、寺社、土地の名、そして城が記録される。天正11年1月4日の日記には鎌田政近の名が見える。都於郡城の主である。私は都於郡城は日向では最大規模であることはどこからか聞き及んでいたし、日記に登場する強者どもが(も)生きた有様を深めたいと思っていたところへ、この度の山行だ。よい機会なので参加しようと思い立った。

都於郡城は東側から登るようになっており、そこはすぐに本丸である。本丸曲輪は広大だ。そしてその周囲は堅牢な土塁で固められている。この曲輪の東には町家があったので、おそらく大手門あるいはそれに相当する所はこのあたりであっただろう。比較的平坦で堀も要害もないので、攻手とすれば大手門側からであろう。大手門を突破してすぐに本丸とは無防備にみえるが、もしかしたら囮(おとり)としての役割を設けさせたのかもしれない。

覚兼の生きた時代にはどんな館があって、どのような人がいたのだろう。想像力を逞しくする。本丸の北と西側にはさらに大小曲輪が連携する。空堀の底から曲輪をながめると、はるか急崖の上を見るようである。都於郡城と宮崎城の位置関係を地図にて調べると、なんと同じ山塊（段丘）にあることがわかった。おそらく秘密の岨道が縦横無尽に走っていただろう。覚兼の時代、忍びの者は山くぐりと呼んだようである。両城のみならず日向の各城は密接に連絡していたはずである。山中を駆け巡って、任務を全うしていたのだろう。

日記によれば、南九州の戦国武将は皆信仰熱心だったことがわかる。寺僧は尊敬され、寺や神社は寄進等により厚く保護されていた。都於郡城周辺にも寺社は散見される。そのうちの一つ、黒貫寺は本丸大手門から南へ1.5kmの所にある。伊東氏の時代にはすでに武士の信仰を多く集めていたであろうと思われる古刹である。石段上の山門がよい。私は中世武士や庶民の往来を目に浮かべている。仁王像は時を超えてにらみをきかせている。おそろしいばかりで奥の本堂からも同様のにらみがある。いずれも一度見ると忘れられない形相をしている。どんなものかはぜひ一度御照覧あれ。都於郡城周辺は竹篠の里山。タケノコほりを土産にして、もののふの夢を後にした。

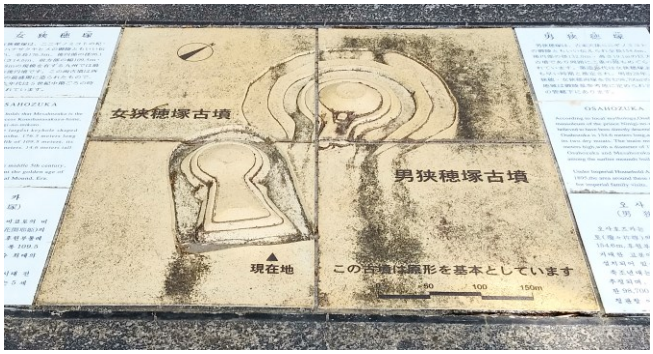
さて三財川の低地に降りて今度は北隣の台地に上ってみよう。西都原の古墳密集地帯が見えてくる。

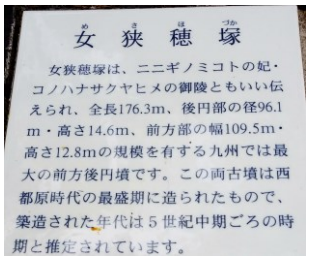
男狭穂塚、女狭穂塚は九州一の規模だ。巨大すぎて、単なる丘にしか見えない。古墳であることを認めるにはしなやかに想像力を働かせる必要がある。巨大古墳を登攀するわけにはいかないし、しょうがないのでツツジ見に繰り出すことにした。この台地の北端は季節にはミツバツツジが美しい。公園として整備され、市民憩いの場となっている。緩やかに遊歩道を行くとすぐに展望台に達する。やわらかな春の日ざしが心地よい。眺望抜群、古墳台地は一望のもと、茶臼原、新田原の台地も確認できる。にわかに山頂であることの証である三角点を発見した。高取山である。標高を118.6mとしている。さらに北に歩を進めると、非常に切り立った崖に出る。この台地の北端は盛り上がり、その先は鋭く切り立っているのである。高取山の尾根筋は台地の縁に沿って南へ続いている。下山はこのルートをとった。これも右側はするどく切り立っている。地図で確認すると、この尾根筋はきれいな円弧を描いていることに気づいた。カルデラ地形に似ている。直径はちょうど1kmである。するどく切り立っている原因は、かつて火山の噴火口であったのか、はたまた隕石衝突によって形成されたクレーターなのか。研究対象が増えた。

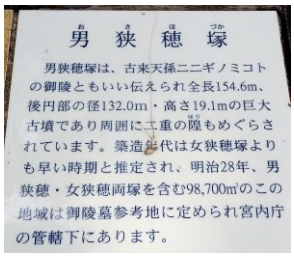
少々モノ足りぬと思われようが、皆の足は無意識にも山の高みへと向かうものである。かくありて日本山岳会宮崎支部13名は古刹、中世山城、古代塚を研究した上、はからずも大登山を決行してしまったというわけである。その晩は皆達成感にあふれ、タケノコを食って寝たことだろう。

<参加者14名> 谷口敏子・多田登美子・服部澄子・白賀智子・吉永美知恵・荒武八起・吉田直人・谷口菊美・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・畑島良一・四宮林三・川越政則

<コースタイム>ヤマダ電器駐車場（新別府町）8:00出発～黒貫寺～都於郡城址～このはな館～西都原古墳群（女狭穂塚）～高取山～ヤマダ電器駐車場15:00解散







西都原古墳群内の御陵墓

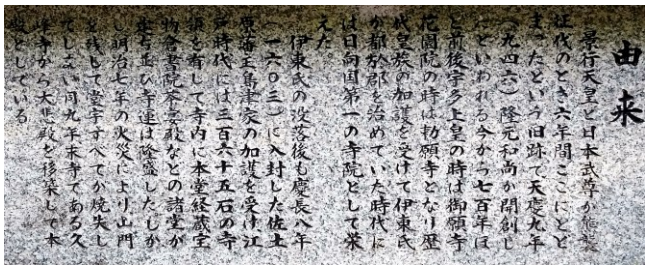
都於郡城跡概念図

都於郡城跡を散策する

遣欧少年使節の主席を務めた伊東満所の像

黒貫寺山門

西都原で昼食



黒貫寺の由来を記した碑文

[4月定例山行2]　鰐塚山山開き　4月25日(日)

林田 明美

<参加者12名> 服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・林田明美・蔵屋とよ・白賀智子・荒武八起・酒井保男・多田周廣・服部岩男・四宮林三・川越政則

<コースタイム>鰐塚山登山口9:00～山開き式典9:30出発～山頂12:00～昼食～下山開始13:00～登山口15:00解散

雲一つない晴天に恵まれた中、登山口で山開きが行われた。コロナ禍なので全員、神事の前に検温し、集まったのは50人程であった。山開き祈願祭では、田野天建神社・宮田宮司による登山者の安全祈願の後、田野まちづくり協議会会長・松浦氏が代表の挨拶をされた。ひき続いて宮崎森林管理官、田野まちづくり協議会代表・小手川氏、登山者代表として日本山岳会宮崎支部会員・酒井保男氏が玉串奉奠を行った。

平成17年に整備された「いこいの広場」が水害で破壊された後、平成24年から山開きをするようになり、昨年はコロナ禍で中止したが、今年で9回目だそうである。「この宮崎の宝である鰐塚山の自然が人に勇気と希望を与え、コロナを払拭していければ」と主催者・松浦氏が述べられた。

さて、我々山岳会は、二手に分かれ、田野まちづくり協議会の小手川氏の案内で登山を開始した。何人かは、県民体育大会山岳部門の会場となるこの山の登山道整備に向かった。私は登る方に参加した。「なだらかな巻道を用意しておきました」と主催者がいうようにスタートの道はなだらかで上り易かったが、最初の鉄塔に着いた時には鰐塚山が90度上に見え、「どうやって上るんだろう」と心配になった。しかし、きちんと整備されていて登りやすいなという感想を持った。ただ、「宮崎県の山」には難易度1と記載されていたのでもっと楽かと思っていたが、四つん這いになって上る箇所もあった。コース全体をみると、落ちて大変な目にあうような所はなく危険度1は、合っているなと思った。

それにしても、息の上がる登山となったが、頂上の景色は素晴らしく、疲れは吹き飛んだ。当日、大爆発した桜島も、青空に溶け、セロハンのようにぼんやり見えた。東にはシーガイアのある日向灘が見え、西には霧島が望めた。そして総会の時に聞いた双石山について、山を見ながら語り合った。「沖縄からあの双石山は来てるらしい」「へー」・・・その素晴らしい景色を見ながらの楽しい昼食であった。昼食後は小手川氏からイワザクラ群生地を案内していただいた。

さて下山、急斜面を降りていく。「丸まって落ちたら、コロコロ転げて止まらなくなるから、落ちる時には手足は伸ばして」という年長者のアドバイスに納得しつつ、落ちても落ち葉の中だからケガは少ないと思った。登りは2時間半、下山は2時間(休憩含む)であった。コロナ禍で、ほぼ1年登山していなかったので膝にきた。ちゃんとトレーニングしましょうと反省しつつ帰路についた。

NHKをはじめ各局の電波塔がある山頂

田野天建神社・宮田宮司による神事

登山者を代表して支部会員・酒井氏が玉串奉奠

田野まちづくり協議会会長・松浦氏の挨拶

イワザクラ

[6月定例山行]　加江田渓谷散策　6月13日(日)

栗林 淳子

蘚(こけ)むせる岩の谷間に生ひしげる
あまたのしだは見つつたのしも

昭和54年、昭和天皇が加江田渓谷でお詠みになられたお歌で、歌碑が硫黄谷にあります。日本は1,000種以上のシダが観察され、世界に誇るシダの国です。宮崎県では320種あまり、そのうち加江田渓谷では狭い範囲で160種以上見ることができ、まさにシダの宝庫です。

花をつける植物とシダ植物はほとんど一目で区別がつきますが、いざシダだけを取り出してみるとどれも同じように見えてしまいます。イワタバコ、ヒュウガギボウシ、キバナノホトトギスなど季節の花を求めて渓谷を歩きながら、シダが気になるのですが通り過ごしてきました。今回、支部で加江田渓谷の散策があるということで、シダをゆっくりみて見る事にしました。

シダは他の草花と違い、花は咲かせず、茎は地面にあり根茎と呼ばれ、根茎から上がどんなに太く長くても葉柄で、複雑に羽片が切れ込んで葉を広げても全体が一枚の葉っぱとなります。花はつけないので、雄しべと雌しべの役割を葉の裏の胞子嚢がおこないます。葉の裏でなく別に胞子葉を出す種類もあるります。

数あるシダを見分けるためには、①葉の様子（全体の形、葉の切れ込み、質感等）②葉の裏のソーラス（胞子嚢群）の形、つく位置 ③根茎の形 ④鱗片の4項目に注目するのですが、ざっくりと葉の様子と葉の裏のソーラスで見て分かりやすいものから見てみましょう。

遊歩道の入口までは穂先の長いホシダやワラビが目立ちますが、遊歩道に入ると右側の崖には色々な種類のシダが出てきます。シンプルな単葉のマメヅタ、細身のヘラシダ、ノキシノブ、幅広のクリハラン、スジヒトツバ。マメヅタは小指の先ほどのやや楕円でびっしり崖に群生です。ヘラシダとノキシノブは似ていますが、ソーラスが筋状と丸で見分けます。ミツデウラボシはその名の通り三本指を立て裏には丸い星がついています。クリハランはランと名が付きますが栗の葉に似た横筋のシダです。スジヒトツバは崖に付いていますが、三本縦筋がはっきりしていて一度見たらすぐ覚えられます。

次は形が印象的ですぐ見分けがつくようになるシダです。アマクサシダは細い針金のような柄に鳥が羽を広げた様な羽片が3～4対ついて先は穂状に伸びていて最初に覚えた大好きなシダです。コンテリクラマゴケは直射日光の当たらない所では青みを帯びてまさに紺照り！ 多目的広場は、以前は鬱蒼としていて、このシダがとても綺麗なところでしたが、整備されて直射日光が当たるようになって色が茶色くなってきました。中国原産で明治時代、欧米を経て観賞用に日本に入ってきた帰化植物だそうですが、どうやって加江田渓谷に住み着くようになったのでしょうか。

硫黄谷にある昭和天皇の歌碑

イノモトソウ、オオバイノモトソウ、マツザカシダはよく似ていますが、栄養葉の幅、胞子葉の大きさがちょっと違います。マツザカシダはシンプルながら白い線が入り目を引きます。

栄養葉と胞子葉が別の形のものも分かりやすいシダです。オオキジノオシダは四方に出ている雉の尾に似た栄養葉の中心からスーと高く細い胞子葉が数本出ていてすぐわかります。近くに葉っぱの様子がちょっと違うと思って調べるとキジノオシダでした。ゼンマイの種類、マメヅタにも胞子葉がでます。

紫紅色の綺麗な若葉も目につきます。ベニシダかヌカイタチシダです。一番下の羽片の最初の下の小羽片が長いのがヌカイタチシダですぐ区別がつきます。タチシノブとホラシノブも似ていますが葉の切れ込みが細いのがタチシノブ、ソーラスの形も違すます。混じって群生している所もあるので比べてみてください。ウラジロとコシダも同じ崖の上部にウラジロ、下の方にコシダと生育しています。

ちょっと奥まった薄暗い谷の崖一面に群生しているのはホウビシダで、そばには穂先の長いヘツカシダも下がっています。大きく葉を広げるのは、リュウビンタイ、シロヤマシダ、ハチジョウカグマ、オオタニワタリなどです。小さいのは草のようなトウゲシバ、ヒバの葉の様なカタヒバ。

図鑑片手に歩いて、心惹かれるシダに出会ってもなかなか名前にまでたどり着けません。紹介できたのはほんの一部ですが、名前がわかると親しみも湧いて散策するのも楽しくなるのではないでしょうか。

ヘラシダ

アマクサシダ

コンテリクラマゴケ

マツザカシダ

キジノオシダ

ウラジロとコシダ

ホウビシダ

リュウビンタイ

トウゲシバ

資料を片手に熱心に観察

〈参加者15名〉
多田登美子・服部澄子・
栗林淳子・橋口三枝子・
荒武八起・日高研二・
多田周廣・櫻木勉・
服部岩男・川越政則・
栗林忠信・会員外(4名)

[7月定例山行]　鉾岳トレッキング　7月11日(日)

風間 恭子

今月は宮崎県延岡市の北方エリアのトレッキング。ここ北方エリアには鹿川渓谷、鬼の目山、比叡山、鹿川キャンプ場、ETOランド速日の峰などお子さんから中高年の私たちまでみんなが自然に触れあいアスレチックな体験ができる大変魅力のあるエリアである。早朝に集合した宮崎市内メンバーと日向市内のメンバーがよっちみろ屋で(8:40)合流。ここから鹿川渓谷へ向かう道中に自然の造形美を誇る矢筈岳の展望が開ける。道幅はやや狭く離合が数回必要となり狭いトンネルも通過し、最後のトイレ休憩(10:00)鹿川渓谷駐車場にて平田さんよりメンバー紹介と本日の行程説明。

パックン岩近くに咲くツチビノキを愛でヒメシャラ林をぬけ鉾岳おんぼこ山頂1277m高低差550mの道のりを目指す。(10:30)登山口を過ぎるとほどなくして目を引くタケニグサの群生地。その奥に鉾岳がそびえる。ここ北方は干支の町でもあり道中あちこちにかわいい木彫りのオブジェ、足元にはキランソウ、コナスビ、キノコを見かけそのたびに撮影隊の足が止まる。その間も色あせた目印を見やすい場所にピンクリボンをつけながら平田さんと竹田さんが誘導、整備してくださりメンバーは自然の息吹を感じながら安心して進む。ヒメシャラのつるつるとした幹は何とも涼しげでたわわに咲き誇った白くかわいらしいお花が地面を覆うように落ちていて癒される。

前日からの雷雨で木の根や岩は滑りやすくぬかるむ場所もあったが転倒者もなく体調に合わせながら休憩し水分、塩分を補給する。ほどなく進むと花崗岩からできた一枚岩スラブを臨むことができる。高さは350mにも達し全国的にも最大級といわれる鉾岳の姿は息をのむ。渓谷のせせらぎとシャーシャー鳴くセミの声に夏を感じながら登ってきた先には、岩肌を這うようにスローモーションで流れ落ちてくる滝の姿は美しすぎてため息。本日一番の景観である。鉾岳と白滝が見られる巨石周辺にはヤマアジサイ、リョウブ、ヤマボウシ、ヤマジノホトトギスなどの花を愛でることもでき、(12:30)目的のパックン岩滝つぼ周辺に咲くツチビノキは見頃を迎え、世界でここにしか咲かない花との出会いが心和ませメンバーを癒してくれた。

前日に雷雨の影響はないか下流の川の濁りを確認してくださった平田さんのおかげで決行が決まり安心してトレッキングに望めた。巨石渡渉のはしごとロープは全員無事通過できるか緊張する場面も平田さんのサポートもありスムーズにクリアできた。パックン岩への足場補助ロープ設置など準備、計画と大変お疲れさま。全行程約3.5km約5時間うち休憩時間2時間、高度差412m。山域auのみ通信可能。

16名の参加者の中で1組2名が途中下山した。合流はできたがGPSアプリ利用など遭難や事故に対する備えも今後の課題となった。

<参加者16名> 拵恵子・谷口敏子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・竹田裕見子・風間恭子・荒武八起・日高研二・谷口菊美・武田芳雄・櫻木勉・服部岩男・四宮林三・平田五男・栗林忠信

<コースタイム>7:00ヤマダ電器駐車場～8:45よっちみろや～9:40鹿川渓谷駐車場～10:30登山口～12:50パックン岩(昼食)～13:40下山開始～15:15登山口～17:10よっちみろや～18:45ヤマダ電器駐車場・解散

登山口付近から見る鉾岳

花崗岩のスラブと滝

パックン岩

ツチビノキはジンチョウゲ科の植物で樹高は1m以下、葉は10-15cmと大きい。花期は6-7月。世界でこの山域にしかない固有種である。

ツチビノキの花

下山後

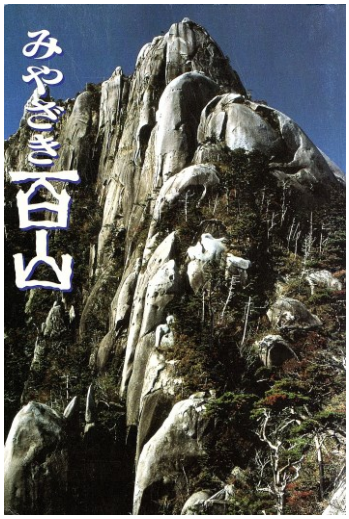
夫婦で踏破した「宮崎百山」の思い出

多田周廣

2007年7月20日　家内の「頭巾岳」登頂を最後に夫婦共々、宮崎百山を登り終えた。日本山岳会入会以来約6年間をかけ達成。入会後4年間は宮崎百山踏破など考えもせず、ただ定例山行、誘われてのグループ登山で時を過ごしていた。ある時、谷口菊美さんご夫妻の「宮崎百山達成」の話に刺激され、後半2年間で約40山の踏破をこなし百山踏破を達成した。今、思えば会員の同行等の協力、役場・営林署への林道状況の問い合わせ・民宿の情報収集等、会員のご尽力が無ければ到底達成出来なかった。

津野岳では熊本側からの登山を試みたが地主に入山を断られ、改めて宮崎側の飯干峠より馬口峠経由の往復登山となった。釣鐘山に登った時は高千穂町に宿泊し翌日は筒ケ岳に登りさらに赤川浦岳に登った。筒ケ岳ではキツネを見た。500m以上は離れていたと思うが、2・3分の間我々をじっと見つめて消えていった。赤川浦岳では帰路、落雷に遭い駆け足で下山した。また、揺岳・大仁田山・黒岳は1泊2日の連登であった。その日、登山口が分からず引き返した山も幾つかあった。特に西林山は、登山口を探すのに3日を要した。

雨風による被害は我々登山者にも大きな影響を与えた。椎葉村の高岳は椎矢峠さえ通行が正常ならば登山口から往復1時間ちょっとの行程であるが、五ヶ瀬ハイランドから登り向坂山・三方山経由高岳往復を強いられた。洞岳は日隠林道通行が正常の折7月の暑い日に登った(前日には比叡山に登る)　続いて頭布岳に登る予定を女郎墓見学を優先した。この頭布岳の後回しが最後まで苦労の種となった。五葉岳登山は災害後の登山の為大分側から夏木山経由五葉岳往復の強行登山であった。朝八時頃より登り始めたが、11月下旬の季節でもあり下山した時には既に日も暮れ闇の林道を走って帰った。後に残した「頭布岳」の登山道、日隠林道は2006年8月の豪雨でズタズタに崩壊、開通の見通しはたっておらず　99山達成で足踏みであつたが、見立からの登山道に挑戦して達成できた。私は本格的な登山はやっていない。しかし山の仲間の素晴らしさが定年後の生活を素晴らしいものにしてくれた。今後もそうありたい。



日本山岳会宮崎支部著・編
著者:大谷優(2000年11月1日発行)

[グループ山行]　えびの高原池めぐり　7月19日(月)

荒武 八起

雨の日もまた楽し

支部の定例山行は原則として週末に設定しているが、仕事等の都合で参加できない会員がおられる。その代償として、川越会員の呼びかけにより7月19日(月曜日)にえびの高原の池めぐりを行った。参加者は8名、雨の予報の中3台の車に分乗して出発した。車中、フトントガラスに張り付く雨粒と時折みせる明るい空模様に一喜一憂しながら目的地を目指す。いつもは賑わうえびの高原駐車場も、さすがに閑散としていた。雨の中、テンションが上がらないまま雨具を付け出発した。

若い頃は行くと決めたら何が何でも歩いたものだが、歳をとった今、雨の中の山行はあまり気が進まない。しかし、少し歩くと忘れかけていた雨の中の独特の自然の息吹が心を満たした。綺麗に整備された白紫池までの登りでは、小雨にも負けずカナカナカナとヒグラシがあちこちで鳴いている。雨をさほど気にせず談笑しながら歩いている参加者の後ろ姿をみながら、思い切って来て良かったと思った。

避難小屋にしては立派過ぎる白紫池脇の新築の建物で昼食をとり、のんびりと時を過ごした。白紫池も六観音池も水面は霧雨に覆われていたが、緑濃い森とヒグラシの合唱に包まれ心洗われる一日であった。

〈参加者8名〉多田登美子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・中武照子・荒武八起・多田周廣・川越政則

【自然保護委員会】森づくり活動　双石山小谷登山口育林作業　7月4日(日)

暑い中、お疲れ様でした！

前原 満之

昨年の春植樹し、秋に補植した小谷登山口の植栽地の草刈りに、宮崎市山岳協会の加盟団体として参加した。他団体、一般参加を含め約50名(支部会員16名)が参加。予定の9時より早く作業に入り約1時間の作業。34度を超す真夏日の中、皆さん、懸命の作業が続いた。だが全部を刈り終えるまではいかなかった。植栽木以外にも多くの自生木が生えており、その中にはそのまま育てた方がいい木も多い（下草を抑制する面からも）。多くの人は切るべき木と残した方がいい木の区別がつかないだろうが、苗木の成長に支障のある木以外はなるだけ残した方がいいと思う。

作業道を上っていくと、アシナガバチに刺された人が・・。早速用意していたポイズンリムーバー（写真）で毒を吸い出す。この際、注意することは1分位したら一旦外すこと。そのまま長く吸い続けると皮膚の組織を傷める。これを繰り返す。

ポイズンリムーバー

作業を終えて

宮崎県で最も低い一等三角点

永峯 麗子

点名：六ッ野、山名：なし、標高：123.34m、私有地（ゴルフ場）、基準点コード：TR148302190、選点：明治25年、地上埋設、5分の1万図名：妻、北緯32°　00′48″3324 東経 131°　22‘16”6353、所在地：東諸県郡国富町大字三名字大迫三角道

日豊本線日向住吉駅から国道219号、県道14号線を走り、亀の甲カントリー倶楽部の駐車場に駐車。事前に許可を得て、CCに入りゴルフ管理道を歩き6番ホール斜面の上の三角点に出る。宮崎県の一等三角点・14座中「六ッ野　」が未だ未踏であった。令和3年5月4日、足のない私は日本山岳会・宮崎支部会員3名に誘われ一等三角点「六ッ野」をめざした。宮崎市内より県道17号線から24号線に入り、今は全面太陽光発電パネルが敷き詰められた亀の甲カントリー倶楽部と亀の甲ゴルフ練習場の間の細い稜線を登り、一等三角点・点名六ッ野標高123.34mに至り標柱にタッチした。標柱は一辺18㎝足らず、大きな破損もなく宮崎ゴルフ倶楽部による案内板も立てられ大切に守られていた。

亀の甲ゴルフ練習場からボールの打ちっ放しに興じる人々の歓声も聞こえ、5月に入ったばかりの爽やかな風の吹き渡る野づらには楤の芽が伸び立ち竹の子もにょきにょきと出ていた。今日ひと日、地理に明るく博識で悠々自適、山仲間といて心平らになりゆく自分だった。今夜の箸休めにその刺に悲鳴をあげながら楤の芽を折りつつ念願だった「六ッ野」を後にした。

選点明治二十五年一等三角点「六ッ野」未踏なればよろこびとして登り来ぬ

鋭きその刺に悲鳴あげつつ楤の芽折りぬ山の傾(なだり)に

六ッ野・一等三角点と筆者

<参加者4名>
大谷節子・長峯麗子・
谷口敏子・谷口菊美

＜宮崎の自然＞ ムクドリ

石井 久夫

夕方うす暗くなると約200羽ちかくのムクドリの群れが我家近くの竹やぶのある疎林に一夜の宿として飛来する。集団で群れながら林に降りたり飛びたつことを繰り返し騒々しい声で鳴きかわしながら寝る場所を決めてヒユルーヒユルーと金属的な大声で鳴きながら一夜を共にしている。

昼間の時間にも同様に近くにある山桑に集まって実を採餌している。いっぱいに実った桑の実が2～3日のうちに殆どなくなりよくみると半数近くがその年に生まれた幼鳥で一斉に飛び立ったかと思うとすぐにもとの場所に降り立ち同じ動作をくりかえしいつの間にか遠くへ飛び去って行く。

この様にムクドリには群生する性質があり集団の意義については次のように考えられる。ある地域の個体が一堂に会することにより自分たちの力を把握すると言われ、農村的自然（サバンナ的景観）の中で餌となる果実等を多くの仲間が同時に餌にありつける機会をもち個体もふえて群れの社会が発達する。この様にムクドリが群生する性質の理由として身の安全を守るとか餌の確保が出来る。

ムクドリの生態について日本では村落や市街地にみられ春は番(つがい)になり巣作りの場所をさがし秋になると群れを形成して生活をしている。昔はケヤキなどの大木の樹洞に巣を作っていたが樹洞の少ない市街地では家屋の戸ぶくろなどを利用している。巣の様子は落草を積みあげ真中に卵を産む場所をへこませて羽などをしき4～7個の青白色の卵を4～5月頃に生んで子育てをする。

ムクドリの餌は主に昆虫、クモ、木の実、ミミズ、カタツムリで地面を歩きながら探していることが多く、主に公園の芝生、牧場で食物をさがしている。秋になると熟した木の実とくに柿が好きで、大体春から夏にかけては果実、秋から冬にかけては木の実を採餌し子育ては雌雄交代で約13日間卵をあたためて20日くらいで巣立ちをする。

繁殖を終えた親鳥とその年に生まれた若鳥は日中群れで畑や草原で餌をとり夕方に同じ塒(ねぐら)に集まる。塒の群れは夏の初めは小さく数多くの塒ができるが、秋になれば塒の数が減りひとつの塒に沢山の数のムクドリが集まり、時には何万羽という集団になる。時には塒は河原の林や郊外の森など安全な場所にあり、冬の間は大きな群れとなり生活している。

ムクドリの鳴き声は金属的であり、姿として嘴(くちばし)と足が黄色で飛翔は直線的で頻繁に滑空を交える。歩行は巧みでしっかりした足を交互に出して歩く。昔からムクドリは益鳥といわれ、秋に稲刈りあとの切り株にひそんでいるメイガの幼虫を食べることで害虫の駆除に貢献している。特にムクの木の実を好んで食べることからムクドリの名がついたといわれ、サクランボを好むことから地方名としてサクラドリの名もある。時にムクドリの群れの中に外来種のホシムクドリが混じっている。

〈ムクドリ メモ〉
学名 sturnus cineraceus
体長21cm灰黒色で頭部と翼は黒味が強く腰は白く顔には白い羽毛あり、嘴(くちばし)と足は橙色で声はキュル、キュルとさわがしく鳴く。
留鳥として村落附近や市街地に多く芝生等で歩いて昆虫をとる。樹上で木の実を食べる。夏から春にかけて群れを作り電線等に並んでとまる。塒(ねぐら)は何万羽という大群になる。

軍谷の古道を飾る山桜
島の夏廃家の赤秀(あこう)百選樹
山法師白馬の駅に実の一つ
山姥の伝説山になかまど
菅平夜は初雪牛を追う

鶴田 鎮丈

[事務局だより]

支部行事予定 (8月～12月)

月日	行 事 名	標高、他	備 考
8月5日(木)	第263回定例登山研究会		宮崎市中央公民館
8月8日(日)	山の日・市山協と共催	双石山登山・加江田渓谷散策	宮崎市鏡洲丸野駐車場
8月21日(土)	装備品点検		延期
9月12日(日)	鰐塚山、旧道・新道の交叉踏破	1,118m	
9月23-26日	定例山行・北アルプス		コロナのため中止
10月10日(日)	尾鈴山・名貫川渓谷	1,405m	
10月23日(土)	定例山行・岩壺山	737m	
11月2-3日(火,水)	第36回宮崎ウエストン祭		高千穂町と宮崎支部共催
11月14日(日)	定例山行・くんぱち山	500m	
12月11日(土)	清掃登山・双石山		市山協と合同

支部会務報告(4月～7月)

月 日	事業・行事	開催場所	人員	備 考
4月10日	定例役員会	宮崎市中央公民館	10	
4月10日	第260回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	29	
4月10日	令和3年度通常総会	宮崎市中央公民館	29	委任状13
4月11日	4月定例山行1	西都原散策	14	
4月25日	4月定例山行2	鰐塚山山開き	13	参加者総数30
5月7日	第261回定例登山研究会	宮崎市中央公民館		コロナのため中止
6月3日	定例役員会	宮崎市中央公民館	10	
6月3日	第261回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
6月13日	6月定例山行	加江田渓谷散策	15	
7月1日	定例役員会	宮崎市中央公民館	10	
7月1日	第262回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	17	
7月4日	植樹後の下草刈り	小谷登山道	16	参加者総数50
7月11日	7月定例山行	鉾岳・鹿川渓谷	16	
7月24日	ときめき家族登山	猪八重渓谷		コロナのため10月に延期

編集委員会から

投稿のお願い 山行に関するものはもとより、随筆・詩・短歌・俳句など何でも結構ですので皆様の積極的な投稿を何卒よろしくお願いします。また支部報に関するご意見などありましたら編集委員会へ忌憚なくお寄せください。

カラーページのご案内 配布しております本支部報は、経費節減のため白黒印刷ですが、日本山岳会ホームページの宮崎支部を開きますとカラーで閲覧できますので是非ご覧下さい。

発行回数の変更 : 支部報は年4回発行してきましたが、年3回に変更することになりました。ご理解下さいますようお願い申し上げます。

編集後記

コロナ禍や異常と思える気象状況の中で、予定通りの山行は不可能かと思っていたが、バラエティーに富んだ原稿に引き込まれた。

山頂を目指さない、体力の余裕を少し残して、その時々の自然を受入れ、たまには霧雨の中も歩いてみる、歴史を秘めた山道を歩いて想像を巡らせる、見慣れた植物を深く見直す、世界でここにしかない花を見るために素晴らしい仲間の協力に感謝しながら必死に登って達成感を得る。

みんな山が好きですよね。元気をいただきました。山の力を貰うべくコロナに負けないよう健康第一の生活を心掛けましょう(多田)

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 第76号
発行責任者：荒武 八起
編集委員：谷口 敏子(編集委員長)、多田 登美子
拵 恵子
事務局：日高研二
〒880-0933 宮崎市花山手東2丁目17-11
Tel, Fax 0985-52-6685, 080-1766-1207
E-mail： k-hidaka@har.bbiq.jp
口座: ゆうちょ銀行 記号17310 番号16269811
名義人：(社) 日本山岳会宮崎支部